

# 鳥鳴く朝のちい子ちゃん

小川未明

青空文庫



ちい子<sup>こ</sup>ちゃんは、床<sup>とこ</sup>の中<sup>なか</sup>で目<sup>め</sup>をさしました。うぐいすの鳴<sup>な</sup>き声<sup>こえ</sup>が、きこえてきました。

「おや、ラジオかしら。」

このごろ、いつもお休<sup>やす</sup>み日<sup>び</sup>の朝<sup>あさ</sup>には、小鳥<sup>ことり</sup>の鳴<sup>な</sup>き声<sup>こえ</sup>が放<sup>ほう</sup>送<sup>そう</sup>されたからです。しかし、その声<sup>こえ</sup>は、お隣<sup>となり</sup>の庭<sup>にわ</sup>の方<sup>ほう</sup>からきこえてくるような気<sup>き</sup>がしました。あちらには、梅<sup>うめ</sup>林<sup>ばやし</sup>があるし、木立<sup>こだち</sup>もたくさんしげっていますから、どこからかうぐいすが飛<sup>と</sup>んできて鳴<sup>な</sup>いているのでないかとも、思<sup>おも</sup>われました。

「お母<sup>かあ</sup>さん、あれラジオのうぐいすなの。」と、ちい子<sup>こ</sup>ちゃんは、聞<sup>き</sup>きました。

とつくに起きて、家の中で働いていらした、お母さんは、

「ほんとうのうぐいすですよ。花が咲いているから、飛んできたのです。さあ、あんたも早く起きて、お顔を洗いなさい。いいお天気ですよ。」と、おっしゃいました。

「ああ、そうだ。日曜学校へいって、先生からお話を聞いて、それから、とみ子さんや、まさ子さんといっしょに遊ぶ、お約束がしてあったのだ。」と、思い出すと、ちい子ちゃんは、すぐに床から出ました。

空は、緑色にすみわたっていました。朝日がさして、木々の葉はいきいきとかがやいて、いい気持ちであります。

ちい子ちゃんは、ご飯をいただいてから、お机の前でまごまご

していました。お母かあさんに髪かみを結ゆってもらって、時計とけいを見ると、じき八時じになります。

「あら、おくれたらたいへん。」といって、お玄げん関かんで、げた箱げたばこからくつを出だしてはいて、お家うちを出でました。

さっきのうぐいすでしょう、こんどは、どこか遠とおくの方ほうで鳴ないている声こえが、きこえてきました。垣根かきねのそばを歩あるいていくと、赤あかいつばきの花はなの咲さいた家いえがあります。ご門もんのところに、ぼけの花はなのいつぱいに咲さいている家いえもありました。またお庭にわに白しろい花はなの咲さいた、高たかいこぶしの木きのある家いえもありました。そして、ちい子こやんが、広ひろい通とおりへ出でようとしたとき、一軒けんのご門もんの前まえに、一人ひとりのおばさんが、ふろしき包づつみをかかえて、紙かみ片きれを持もって、門もん

札をながめながら、ぼんやり立っているのを見ました。ちい子ちゃんが近づくと、

「お嬢ちゃん、川上さんという家をござんじありませんか。」  
と、お婆さんは、聞きました。

「川上さん？ 私、知らないわ。」

「番地を書いてもらってきたのですけれど、この番地が見つからないのですよ。」

お婆さんは、家政婦さんか、女中さんでありました。雇われるお家がわからなくて、困っているのです。ちい子ちゃんは、しろあたら  
白い新しいたびをはいているお婆さんが、なんとなく気の毒になりました。

「おばさん、待<sup>ま</sup>っていていらつしやい。」

ちい子<sup>こ</sup>ちゃんは、あちらの角<sup>かど</sup>にあつた、たばこ屋<sup>や</sup>へ飛<sup>と</sup>んでいき  
ました。そして、川<sup>かわ</sup>上<sup>かみ</sup>という家<sup>いえ</sup>をたずねたのです。

「ああ、川<sup>かわ</sup>上<sup>かみ</sup>さんですか。このごろ、越<sup>こ</sup>してきた方<sup>かた</sup>でしょう。  
こちらの路地<sup>ろじ</sup>を入<sup>はい</sup>って、つき当<sup>あ</sup>たりの家<sup>いえ</sup>です。」と、たばこ屋<sup>や</sup>で  
教<sup>おし</sup>えてくれました。

ちい子<sup>こ</sup>ちゃんは、あちらに立<sup>た</sup>っていた、おばさんのところへ飛<sup>と</sup>  
んでいって、知<sup>し</sup>らせてやりました。

「お嬢<sup>じょう</sup>ちゃん、どうもありがとうございました。」と、おばさん  
は、喜<sup>よろこ</sup>んで、いくたびも頭<sup>あたま</sup>を下<sup>さ</sup>げました。

ちい子<sup>こ</sup>ちゃんも、うれしかったのです。往<sup>おう</sup>来<sup>らい</sup>へ出<sup>で</sup>ると、人<sup>ひと</sup>が

たくさん通とおっていました。草花屋くさばなやが、手車てぐるまの上うえへ、いろいろの草花くさばなの鉢はちをのせて、「草花くさばなや、草花くさばな。」といいながら、引ひいていきました。

どこを見みても、もう、すっかり春はるの景色けしきです。教会堂きょうかいどうのどがった屋根やねが見みえていました。

神かみさまは 軒のきの

こすずめまで

おやさしく いつも 愛あいしたもう

ちい子こちゃんは、うたいながら、教会堂きょうかいどうまで走はしつていくと、

はや、お説せつきょう教が、はじまっています。みんなが、静しずかにし

ていますので、ちい子こちゃんは、お説せつきょう教の終おわるまで、外そとに



待<sup>ま</sup>つていようと思<sup>おも</sup>いました。

ドアの外<sup>そと</sup>には、子供<sup>こども</sup>たちのげたが、ちらばっています。ちい子<sup>こ</sup>ちゃんは、それを一つ、一つ、きちんとならべました。また、げたはこの下<sup>した</sup>に投げ出<sup>だ</sup>してあつたスリッパを、箱<sup>はこ</sup>の中<sup>なか</sup>へ収<sup>おさ</sup>めていました。

ちい子<sup>こ</sup>ちゃんは、お説<sup>せつ</sup>教<sup>きょう</sup>のあとで、子供<sup>こども</sup>たちが、幾<sup>いく</sup>組<sup>くみ</sup>かに分<sup>わ</sup>かれて、先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>から聞<sup>き</sup>くお話<sup>はなし</sup>をたのしみにしていました。

「まさ子<sup>こ</sup>さんや、とみ子<sup>こ</sup>さんは、どこにいらつしやるだろう。」と、ドアのすきまから、内<sup>うち</sup>をのぞいたので。けれども、みんながあちらを向<sup>む</sup>いて、同<sup>おな</sup>じ頭<sup>あたま</sup>をしているので、よくわかりませんでした。高<sup>たか</sup>窓<sup>まど</sup>の色<sup>いろ</sup>ガラスから流<sup>なが</sup>れる、黄<sup>きむら</sup>や紫<sup>さき</sup>や、青<sup>あお</sup>の光<sup>こう</sup>線<sup>せん</sup>は、

ふしぎな夢の国を思わせました。壁にかかっている、いつもにこやかなお顔のマリアさまは、手をさしのべて、みんなの頭をなでていてくださいました。ちい子ちゃんは、びつくりしました。

「おばあちゃん、おんも……よう。」と、このとき、坊やが、わめいたからです。みんなは、だまって、牧師さまのお話を聞いているのに、坊やだけは、わからないから、外へ出たいというのでした。

「おとなしく、じつとしていらっしやい。」と、大きな声で、おばあさんが、いつています。

急に、この二人の声で、ほかの人たちは、牧師さまの声が、耳に入らないので、困っているようでした。

「おばあちゃん、おんもよう。」と、坊やは、腰かけから立ち上がって、すねています。

「外へ、いくのかい。」

みんなが、おばあさんの方をふり向きました。しかし、おばあさんは、平気なものです。

「どうぞ、しずかにしてください。」

牧師さまは、たまりかねて、おばあさんに注意なさいました。「さ、さ、おんもへいきましよう。」と、おばあさんは、孫の手を引いて、ドアの方へやってきました。

「あら、小西のおばあさんだわ。」と、ちい子ちゃんは、目をま  
るくしました。

こにし  
小西のおばあさんは、つんぼで、人のいうことが、よくきこえぬのです。だから、自分も、大きな声を出して、なんとも思わなければ、また、みんなに迷惑をかけることもわからないのでした。

おばあさんが、坊やをつれて、ドアの外へ出ましたから、そこに立っていた、ちい子ちゃんは、おじぎをしました。

「だれかと思ったら、ちい子ちゃんですか、あんたは、いまいらしたの。」と、おばあさんは、大きな声でいいました。

「きれいに、だれが髪をゆってくださいましたの。」

「お母さん。」と、ちい子ちゃんは、答えました。

「まあ、赤いリボンをつけて。」

おばあさんの声こゑが、よくへやの内うちへ聞きこえるので、みんなが、こちらを向むいています。

ちい子こちゃんは、きまりがわるくなりました。

「坊ぼうや、おいで。」

ちい子こちゃんは、坊ぼうやをつれて、教き会よう堂かいどうの横よこ手ての方ほうへいき  
ました。そこには、桜さくらの木きがあつて、花はなが咲さいていました。腰こしか  
けや、すべり台だいなどがありました。

もう、花はなが、ちら、ちら散ちつています。坊ぼうやは、それを拾ひろつて  
いました。

「坊ぼうや、すわると、おべべが、よごれるよ。」

おばあさんが、大おおきな声こゑでいいました。ちい子こちゃんは、ここ

なら、みんなのおじやまにならぬと思つて、安心あんしんしていました。

ちい子こちゃんが、ベンチに腰こしかけていると、おばあさんが、そばへきて、

「あなたのおくつは新あたしいの、いつ買かつてもらつたの。」と、聞ききました。

「こないだ、学が校こうへ上あがつたときよ。」と、ちい子こちゃんは、答こたえました。

「いま、おくつは、お高たかくなつたんでしよう。」と、おばあさんは、いろいろのこを話はなしました。坊ぼうやは、拾ひろつた花はなびらを、またまいていました。花はなびらは、ひらひらと白しろいちようちようのように、風かぜに舞まいました。

「ちい子ちゃん、あんた忘れたでしょう。小さいとき、道を歩いていて、前へいくよそのお姉さんを見て、お母さん、あんなくつよ、わたしほしいわといったことを。そのお姉さんのくつは、かかとの高い、さきのがった、ハイカラのおくつで、ダンサーか、女優さんのはくくつで、あんたが、そういったものだから、通る人がみんな見たのでそのお姉さんは、きまり悪がつて気の毒だとお母さんが、おつしやいました。」と、おばあさんが、いいました。

「おばあさん、ハイヒールでしょう。」

「そう、そう、そのハイヒールとかいうくつです。ちい子ちゃん、くつはあんなのより、やはりこうした、かかとの平らな、すこし

「おお、大きいぐらいのが体のためにいいのですよ。」

「おばあさんは、たいくつなもので、だれとでも話したかったのです。」

「ちい子ちゃん、そんなこと覚えていますか。」

「わたし、忘れたわ。」

「みんな小さいときのことは、忘れてしまうものかね。」

そのとき、坊やは、ひとりで歩いて、教会堂の門から、外の方へ出ていこうとしていました。これを見つけた、おばあさんは、

「あ、坊や、ひとりでいつては、あぶないよ。」と、もう、ちい子ちゃんのことなど忘れて、坊やの後を追っていきました。



「ほんとうに、私わたし、そんなことがあつたかしらん。」

ちい子こちゃんは、いまごろぼくし牧師まさまのお説せつきよう教おが終おわつて、  
先せんせい生せいのお話はなしがはじまる時じぶん分ぶんだと思おもつて、ドアほうの方ほうへ、足あし音おと軽かる  
く歩あるいていきました。そして、静しずかに中なかへ入はいつていきました。ち  
い子こちゃんは、かわいいお嬢じようちゃんです。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス

1940（昭和15）年4月

※表題は底本では、「鳥《とり》鳴《な》く朝《あさ》のちい子《こ》ちゃん」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年4月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 鳥鳴く朝のちい子ちゃん

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>